

恩師 野村昭夫先生の思い出

野村昭夫先生が、本年5月、お亡くなりになりました。78年の御生涯でした。私は、ゼミの学生として2年間お世話になりました。今回、東京経済大学経済学部長の橋谷弘先生から論文の校正と追悼文の依頼を受け、野村先生と母校への報恩感謝の思いでお引き受け致しました。野村先生との思い出と題して少々お話しさせていただき、追悼文とさせていただきたいと存じます。

さて、私が在学しておりました1990年当時、大学のゼミは卒論ゼミを含めて2年次から4年次までの3年間履修するというのが標準的な制度となっていたように記憶しております。そんな中で、3年次から中途の入ゼミ希望は非常に狭き門でした。緊張しながら面接試験日を迎え、面接試験会場へドキドキしながら向かったのが昨日のこの様に思い出されます。先生の著書等にはすべて目を通し、当時の世界情勢について色々と調べ、一応自分なりには万全の態勢で臨んだ面接試験でした。しかし、先生はそれらのことに一切お触れにならず、「一生懸命打ちこんでいること」という欄に古流武術の一つの流派で江戸時代に徳川将軍家の剣の流儀となった柳生新陰流（正式には新陰流）を学外で続けているという記述に対して大変興味を示され、面接時間を大幅に超過させながら熱心に新陰流の話聞かれ、私も熱く語ったことだけで終了となりました。面接時間が大変に超過していたこともあり、私としてはいつズバリと本題の質問に戻るのか心配でしたし、面接を受けようと他の学生が後に控えているというのも気になったりと、とにかくヒヤヒヤものの長い長い面接でした。野村先生もかつて新陰流に縁のある古流剣術をされていた時期があったようです。

ゼミでは、「現代の世界経済」（実教出版）をテキストとし、報告担当者と討論者を予め決めて討論を行い、その後すべてのゼミ生が加わって1時間超にわたって質疑応答をし、そして最後に野村先生が解説をされるという形で進められました。また、専門科目の講義では「EC経済論」、「世界経済論」、「国際経済論」（すべてミネルヴァ書房）が主に使われていました。これらの本は、学部時代それこそ何回も何回も真っ黒になるまで読んだものです。その後、卒業してからは、「新版 世界経済論」、「EU経済論」（ともにミネルヴァ書房）に先生が分担執筆されておられましたのでゼミを思い出しながら懐かしく読ませていただきました。今こうして振り返ってみると、高校生までとは違う大学での勉強の仕方、研究とはどういうことなのか、学問の本義である問うことを学ぶということ等について沢山のことを先生から学びました。学生時代は気がつきませんでしたが、卒業してからジワリジワリと生きる姿勢みたいなものと一緒に思い返されてまいります。

ゼミ合宿には、レンタカーを借りていくのが通例でした。先生は、いつも女子学生に両サイドを挟まれるという形で後部座席の真ん中にどんとお座りになられ、話も尽きず現地に到

恩師 野村昭夫先生の思い出

着するまで何時間も楽しそうにワイワイと、それこそ歓談されていました。いつも運転手をさせられた私が運転中孤立しないようにという配慮もしてくださいました。また、帰路においても、ゼミ学生の中には運転手の睡魔なんか知らないと言わんばかりに大いびきをかきながら眠る不届き者もいましたが、先生は運転手の私が眠くならないように帰りこそまた新陰流の話などを向けられ、面接試験の再来かと思われるほど熱心に聞かれたりしました。先生が一番遠いところにお住いであったにも拘らず、まず学生たちの最寄り駅に車を回させ、ご自分はレンタカー店に車を返しに行く私とともに最後までお付き合いしてくださいました。先生とは帰宅方向が同じであったこともあり、レンタカー店から国分寺駅までの道すがら、そして中央線の車中においていつも大学での勉学について、進路について、人生相談等いろいろして下さいました。私は、先生のお心遣いや熱心さに触れて一人の人間として尊敬の念と決意が自然と心の中に満ちてくるのを覚えました。

遺影のお写真は、笑いながら右手でOKのサインを作っている本当に先生らしい懐かしいお写真でした。最後のお別れの時に拝見した眠る野村先生のお顔はとても穏やかでした。長い間お会いしておりませんでした。心の中の野村先生そのままのお顔でした。楽しい思い出を作っていた大学のことが思い出され、とても寂しく涙が止まりませんでした。出会いがあれば別れがあるというのが世の常ではありますが、いざその時を迎えてしまった今、心の中の思い出がこれでまた一つ完結して閉じてしまったように思えてなりません。現在、私も大学の教壇に立って研究と教育を人生の仕事とするような立場になりましたが、その原点を作ってくださったのは野村先生です。先生とお会いしていなければ、先生のゼミに入っていなければ、そして先生と一对一の語り合いを重ねていなければ、私の人生は今とは全く違ったものになっていたと思います。

大学の研究室に懐かしいゼミの同期生から久しぶりに一通のメールが来て、「昨日、野村先生が亡くなられたの」という報に接した時、走馬灯の様に私の脳裏に先生との黄金の思い出が駆け巡りました。居ても立ってもいられず仕事を大急ぎで片付け、とにもかくにもお通夜が執り行われる船橋へと向かいました。会場ではゼミの先輩とも懐かしい再会をすることができました。また、野村先生の奥様やご子息の方々とも一緒に歓談させていただきました。奥様からは、「こうして教え子さん達が来て下さるのがとても嬉しいです」のお言葉を頂戴し、温かく歓待してくださいました。ご子息は、野村先生によく似ておられました。リハビリで入院していた先生が5月の連休で一時帰宅をされ、夜一緒にビールを飲んだのが最後になったと伺いました。

ここで、本集掲載の野村先生の論文について一言申し述べておきたいと思います。論文は、野村先生の手書き論文でした。原稿用紙に色々と手を加えられた形でご提出されておりました。校正に当たりまして、誤字、脱字、スペルミスを修正しましたが、文章等にはほとんど手を加えておりません。章の題目が1箇所抜けておりますが、敢えてそのままにしてありま

す。注につきましては本文中で注の箇所が明示されていないところが5箇所、空欄が8箇所、ページ表記の欠落が8箇所あります。文献に当たって埋めようと努力いたしましたが、どの資料のどの部分が該当箇所なのかを明らかにすることができないものについては空欄のままとさせていただきます。本論文の前篇は、東京経済大学「コミュニケーション科学」(第24号)に掲載されております。読者諸兄におかれましては併せてお読みいただきたいと存じます。

最後になりましたが、野村先生のご一家がこれからもますます幸福で、そして和楽でありますように、また奥様もますます御健康で御長寿でありますように心よりお祈り申し上げます。このような機会を与えて下さいました橋谷弘先生ならびに関係者の皆様方に対しましても心より御礼申し上げます。東京経済大学が学生のための大学として、これからもますます発展していきますよう卒業生として念願し、応援していきたいと申し添え筆をおきたいと思ひます。

16年前、野村ゼミの打ち上げをした記念日に

2008年 7月14日

国士舘大学 准教授 永富隆司